
人類の希望

深紅色の烏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人類の希望

【Nコード】

N8401Y

【作者名】

深紅色の烏

【あらすじ】

2030年、地球。人類は、人口爆発による食糧危機を乗り越え栄えていた。

その一方で、強大な科学力を持つことによる驕りもでき始めていた。長野県松本市、神奈川県箱根町。

突然、この2つの町とその周辺の町が壊滅する。

原因は、不明。しかし、遙か彼方の宇宙に生命が存在する惑星があることを考えると、1つの説が立った。宇宙からの侵略者。

人類と人類の科学戦争の中で2人の男性と2人の女性が動き始める。

戦争が終わりかけたころ、1人の男が言った人類の可能性とは・・・？

人類の変化の可能性について、描くSFになる予定。

エヴァンゲリオン要素が入っていますが、エヴァの世界とは関係がありません。現実世界が舞台となっています。

科学的なことは、あまり考えていませんので、「リアルじゃない」という感想につきましては、スルーさせていただきます。

2030年という設定なので、現在とは違う国家・自治体等が存在します。

登場人物紹介 ? 救世主・ヘルツ

伊吹 純香（いぶき あやか・21）

東都大学 工学部 特殊機械科の3年生。カインがつくった救世主、エノク。

コンピュータに関しては、天才的と言ってもいいほどで、浅井からも一目置かれている。

浅井のことを慕っているが、よく苗字の読み方を「あさい」と間違える。（正確には、あざい）

肉がかなり好きで、あまり野菜は食べないらしい。

由来は、新世紀エヴァンゲリオンの「伊吹マヤ」と政治家で元首相の「小泉純一郎」から。

エノクの由来は、カインの子「エノク」から。

南木 千早（みなぎ ちはや・21）

東都大学 工学部 特殊機械科の3年生。ノアがつくった救世主、ヤペテ。

一人称は「ボク」で、いわゆるボク少女である。

伊吹には、劣るもののコンピュータに関する能力は高い。

伊吹とは逆で、肉は食べられないわけではないが、あまり食べない。

由来は、楠木正成（南北朝時代の武将）と千早城（楠木正成の居城）から。

ヤペテの由来は、ノアの子「ヤペテ」から。

カイン

ヘルツの管理者。アダムとリリスの息子。

約150億年前に、ノアと共にエデンを裏切り滅ぼした。

神に等しいほどの力を持つ。これは、アダムの血を受け継いだためと思われる。

アダム・イヴ・アベルから恨まれている。特に、アベルとの関係が悪い。

由来は、旧約聖書に登場するアダムの子、「カイン」から。

ノア

ヘルツの管理者。リリスの夫でもある。

約150年前、もともとアダムらエデンの上級幹部の野望に反発していたが、カインの裏切りがきっかけとなり、エデンを裏切り、カインと協力した。

カインをひたすらサポートしている。

由来は、旧約聖書に登場する「ノア」から。（ノアの方舟の「ノア」です）

登場人物紹介 ? エデン

アダム

エデンの政治的リーダー（役職名不明）。不老の体を持つが、その代償として右手が不自由である。

イヴの夫。カイン・アベルの父親。

カインは、愛人のリリスとの子で、イヴのことを考えて少し距離を置きながらも気遣っていた。

しかし、カインの裏切りにより、追い詰められ、グリーンランドとともに自爆。

その後、マルスによって、肉体が復活し、思考データが入れられて、元に戻った。

今は、カインへの復讐を心に誓っている。

由来は、旧約聖書に登場する最初の男性「アダム」。

イヴ

エデンのナンバー2（役職名不明）。アダムと同じく、不老の体を持つ。

アダムの妻で、アベルの母親。カインを嫌っていた。

実質的な仕事は、ほとんどないが、能力はそれなりにある。

由来は、旧約聖書に登場する最初の女性「イヴ」。

アベル

アダムとイヴの子。カインに強い恨みを抱いている。

「CHRIST?」の管理責任者で、機械系はかなり強い。

由来は、旧約聖書に登場するアダムとイヴの子「アベル」。

マルス

エデン軍の総帥。エデン復活の最大の功労者で、アダムを呼び捨てに出来る唯一の部下。

軍の統率に長けている。マルス自身が前線で指揮を執ることも、少し粗野なところがある。

由来は、ギリシア神話に登場する戦いの神「マルス」。

ケルビム

エデン軍のナンバー2。かなり慎重な性格で、マルスのブレーキ役にもなっている。

その慎重すぎる性格から、臆病者と言われることもあるが、マルスは気にしていない。

由来は、ヘブライ語で智天使の複数形を表す言葉から。

ハデス

エデン軍第1分隊長。部下思いではあるが、他の分隊をばかにするところがある。

敵を甘く見すぎること多い。性格のせいか、あまり交友関係は深くない。

圧倒的な統率力の高さから、マルスに信頼されている。

由来は、ギリシア神話に登場する冥府の神「ハデス」。

クロノス

エデン軍第2分隊長。命令に忠実な男。

命令をきちんとこなすため、上司からの評価はなかなか高い。
ハデスとの仲は悪いようだ。

由来は、ギリシア神話に登場する大地・農耕の神「クロノス」。

1 全ての始まり ～松本市、壊滅～（前書き）

この物語は、フィクションです。実在する国家・自治体・人物・組織などの名前とは、全く関係がありません。ご了承ください。

エヴァンゲリオン要素が入っております。

1 全ての始まり　　松本市、壊滅

西暦2030年9月13日。午前9時13分13秒。

長野県全域を激震が襲った。大地が裂けんばかりに揺れ、大きな音が響いた。

人々は、避難所へ行き、ラジオを聞きながら、地震の情報を知らうとしていた。

しかし、ラジオからは、全く地震の情報は入ってこない。

それもそのはず。これは地震ではなかったのだ。

そう、人類の変化の時の始まりだった。

危機管理対策委員会　本部。

危機管理対策委員会とは、自然災害、人災、戦争など予想される全ての危機について情報を収集し、対策を立てる委員会である。委員長は、秋山 あきやま 大佐 たいすけ だ。

委員長室にあわてた様子で一人の男が入ってきた。年齢は、30代前半あたりだろうか。なかなか爽やかそうな青年だったが、かなりあわてていた。彼が慌てていた理由は長野での揺れだった。入ってきた男、希崎 まれざき 重治 しげはる 副委員長は秋山に報告をした。

「長野県・山梨県を中心とする地域に地震と思われる震動があったようです。」

「何！？地震か？」

「分かりません。『垓』は、3%が自然災害、4%が北派による攻撃、2%が謎の侵略者による攻撃、あとの91%は解析不能を示しています。」

「垓」とは、日本で新たに作られた超未来型汎用電子計算機のことであり、京をさらに進化させたものである。演算速度毎秒1垓回を目標としており、現在は毎秒1384京回が限界である。しかし、

開発は続けられていて、さらなる進歩も期待されている。「垓」は、汎用高速電子計算機が100台組み込まれていて、それぞれが独自に判断し独自に答えを出す。それを、垓のメインコンピュータがまとめてモニターに表示されるという仕組みなのだ。

垓は、現在日本政府直属の組織、超電子計算機開発機構の施設にあり、さまざまな計算依頼をこなしている。

「とにかく、長野に状況を確認しろ！長野市、安曇野市、松本市、諏訪湖市、伊那市、駒ヶ根市、飯田市に確認を取れ！」

秋山が命令をする。希崎は、返事をすると言員長室を出て行った。秋山も、言員長室を出て、大会議室へ向かった。大会議室では、既に対策本部がつくられていた。秋山が対策本部となっている大会議室に入ると、さっそく希崎からの報告があった。

「長野市、安曇野市、伊那市、駒ヶ根市、飯田市は、応答がありました。被害は住宅の損壊などだそうです。松本市、諏訪湖市はまだ連絡が取れません。調査ヘリを向かわせていますが、もしかしたら・・・」

そのとき、調査ヘリからの連絡があった。

「大変です。松本・塩尻・諏訪の周辺に大きなクレーターのような物ができています。諏訪湖はおそらく蒸発したものと思われます。松本市、諏訪湖市は壊滅したと思われます。」

この報告に、大会議室にいたもの全員が驚きの表情を見せた。いつも冷静な希崎は、他の人と比べれば冷静だったが、驚きを隠せない様子だった。秋山は、垓が示した分析データを基にこう命令した。「まずは、自然災害の可能性を探れ。そして、北派の可能性はないか、防衛省と朝鮮半島連合共和国に確かめろ。とりあえず、それからだ。」

この命令に、大会議室にいた言員たちは動き出した。一部では、コンピュータと睨みあって自然災害の可能性を探っている。一部では、防衛省や朝鮮半島連合共和国に連絡をし、確認をしていた。

北派と朝鮮半島連合共和国について解説しておこう。

北派とは、旧北朝鮮に住んでいた者の中でも、特にアメリカや旧韓国、日本などに対し攻撃的な行動をとる者のことをいう。南北統一により、北朝鮮と韓国は和解し、一つの国となったが、まだ北派はかなりいるという状況だ。しかし、現在は、日本政府の防衛省やアメリカの特別対策委員会、朝鮮の北派對策庁などの監視により、大きな事件は起きていない。ただ、危険性が全くないというわけではない。

朝鮮半島連合共和国は、2021年にできた国家。通称は朝鮮。キム・ジョンイル金正日（1941 - 2015）の死後、北朝鮮と韓国が和解、統合したものである。議院は、旧北朝鮮の北院と旧韓国の南院に分かれている。まだ、完全な統合とは言えないが、かなり南北和解は進行しているのだ。

そして、調査の結果が分かった。

「自然災害の可能性は、おそらくありません。さらに、北派幹部及び協力者と思われる人物は、防衛省やアメリカ、朝鮮がマークしています。北派の攻撃行動でもないかと。」

秋山は、残された一つの可能性に驚いた。「垓」が導き出した答えは、宇宙からの侵略者だったのだ。

「ばかな……、アニメや漫画じゃあるまいし……。そんなことが……。」

秋山は、ただ立ち尽くしていた。

1 全ての始まり ～松本市、壊滅～（後書き）

諏訪湖市について説明をします。

長野県中部にある都市。諏訪市、下諏訪町、岡谷市が合併して誕生した。市役所は、旧岡谷市にある。（合併とともに新たに建設された）

ちなみに、ここが合併するなんてありえない・・・とかそういうのもスルーさせていただきます。なにしろ、初心者ですので、地元感情とかあまり考慮していませんので。

松本市、塩尻市、諏訪市、岡谷市など、松本・諏訪地域にお住まいの方には、お詫びを申し上げます。なぜ、ここになったかといいますが、エヴァンゲリオンで第2新東京市となっているからです。別に個人的恨みというわけではありません。

2 謎の目的　く箱根、壊滅く

「本当に、北派でも自然災害でもないんだな？」

秋山が重い口調で、部屋にいた全員に確認をした。希崎が秋山の質問に代表して答える。

「はい、ほぼ100%ないと思います。」

秋山は、希崎の言葉を聞き、しばらく目を閉じて考えていた。そして、目を開けて、こう言った。

「では、この爆発は、『太陽系外に存在する未確認文明による攻撃行為』と判断する。すぐに、アテーナー（Athena）へ連絡しろ！」

秋山の命令に、数人の委員が返事をし、電話をかけた。

国連直属の組織、特殊機関アテーナー（Athena）とは、地球外の文明との戦争の全てを取り仕切る組織である。東都大学の教授である森崎^{もりさき ひでき} 秀樹が地球外に文明がある可能性を92%、そしてその文明のうちの45%が地球への攻撃を考えたとした研究結果を発表したことで、できた組織である。地球外文明との戦争においては、国家をも動かすほどの権限も持つ。本部は、東京都旧三鷹市にある。（三鷹市は、アテーナー建設のため消滅、住民は八王子市などへ移住した）なぜ三鷹市にこだわったのかは、まだ明らかにはされていない。かなり、謎に包まれた組織である。

そして、アテーナーの最高責任者である、総長の山本^{やまもと} 権太^{ごんた}を先頭に、アテーナーの職員が部屋へ入ってきた。連絡を受けて、霞ヶ関にある本部へかけつけてきたようだった。

「秋山委員長、本件はこれより、アテーナーの指揮のもとで調査等の活動を行います。あなたたちは、アテーナーの指示に従ってもらうことになります。よろしいですね？」

と、山本が秋山に言った。秋山は、承諾の返事をした。

アテーナーの職員は、危機管理対策委員会本部にある資料をまとめてダンボール箱に入れると、部屋を出ていった。最後に、山本だけが残った。山本は、

「とりあえず、危機管理対策委員会は、情報収集をお願いします。何かありましたら、三鷹のアテーナー本部へどうぞ。」

と言うと、部屋を出て行った。秋山は、それを苦い顔をして見ていた。

午後2時21分02秒。再び強い揺れが、今度は東京・神奈川・静岡を襲った。危機管理委員会はもちろんのこと、三鷹のアテーナー本部も大きく揺れた。

「おい、確認を取れ！大田区、横浜市、小田原市、富士市、静岡市、相模原市だ！急げ！」

と秋山が大声をあげていた。すぐに、報告がかえってきた。

「大田区、確認取れました！」

「横浜市、応答しています！建物の損壊等です、大きな異常はありません！」

「だめです！小田原市、応答しません！」

「富士市、確認しました！」

秋山は、これらの報告から、中心地は小田原市周辺と判断し、この周辺の市町村に連絡するように命令した。

「熱海市・三島市・沼津市が応答なし、伊豆市・伊東市・厚木市が応答あります。」

と報告がかえってくる。そして、秋山が派遣したヘリからの連絡が入ってきた。

「箱根町を中心とした半径約25kmの範囲がほぼ壊滅状態です！今度は、箱根だった。ヘリから映像が送られてきた。その映像がコンピュータの画面に映し出される。委員の多くは、画面を見て愕然とした。芦ノ湖は、完全になくなっていた。小田原も熱海も三島も

跡形もなく消えていた。関東有数の観光地が一瞬にして消滅したのだ。おそらく、かなりの威力を持つ兵器による物だろう。本当に我々はこの文明に勝てるのか。秋山も希崎も、その気持ちの心のほとんどを占めていた。危機管理対策委員会の本部を重い雰囲気包み込む。秋山は、この情報をアーテナー本部へ連絡した。

アーテナー本部、山本は、秋山からの連絡を聞いて驚いた。文明の兵器が予想以上の威力を持っていたからだ。それと同時に疑問も浮かんた。なぜ、松本と箱根なのか・・・と。東京や大阪、名古屋、横浜とほかに大都市はたくさんある。しかし、謎の文明は、松本と箱根を攻撃した。次は東京だぞ、という脅しなのか。それとも、松本と箱根に何かあるのか。いくら考えても分からなかった。

とある場所の会議室。

「くそっ！箱根も違ってたか・・・。」

「残るは、宇部だな・・・。」

「しかし、このデータは信頼できるのか？カインは本当に宇部にいるのか？」

「分からん、しかしやるしかない。カインは絶対に殺さなければいけない。」

「こんな声が響いていた」。

「ああ、その通りだ。カインが地球人と接触したら、厄介なことになる。」

2 謎の目的　ゝ箱根、壊滅ゝ（後書き）

箱根、小田原市、熱海市、沼津市などの市町村にお住まいの方、申し訳ありません。ここも仕方ないんですよ……。エヴァンゲリオンで第3新東京市があるというのが理由です。でも、この物語はエヴァの世界が舞台ではありませんが。

アーテナー、登場しました。エヴァでいうNERVみたいなものです。エヴァ色が濃くなっている気がします。気にせずにいきたいと思います。なぜ、三鷹なのは、永遠の謎ということにしてください……。

カイン。彼は何者なのか、それはこれから分かります。楽しみに。

3 伊吹純香 ? 頭痛

愛知県新瀬戸市の地下にある巨大な空間。その中に、1つの建物があった。建物は、高層ビルのような形をしていた。かなり大規模な建物のようなのだ。だが、中にいる人は、1人だけだった。青年が一人いるだけだった。部屋の中には、機械がたくさんあった。そこには、松本・箱根のデータが映っていた。

「ついに、この時が来たか……。人と地球は、僕が守る……。それが、僕の懺悔でもあり、使命でもあるから……。」

青年がつぶやいた。青みがかった髪、整った顔立ち、なかなかの美青年だ。そして、机の上に置いた写真と名前などの個人情報を見ていた。そこには、「伊吹^{いぶき} 純香^{あやか}」と書かれていた。

「伊吹純香か……。早く接触する必要があるな……。」

新東都大学の校門に、1人の女性が立っていた。誰かを待っている様子だった。仕事の合間に寄ったような感じで、スーツを着ていた。胸には、Athenaのバッチがあった。彼女の名前は、浅井^{あさい}レイ。Athenaの技術部 システム課 課長 兼 「Gates^{ゲイツ}（Athenaが独自に開発したスーパーコンピュータ）」総合責任者を務めている。新東都大学で、機械学を専攻し、大学でもトップクラスの成績をおさめたこともある。かなり優秀なコンピューター技術者で、山本からも信頼されている。

浅井は、校門の前でしばらく待っていた。しばらくすると、浅井のもとに1人の女性がやってきた。大学生だろうか。20歳くらいの女性だった。その顔は、青年が見ていた写真と全く同じだった。

「純香、少し力を貸してほしいけど、だめかな？」

と、浅井は純香に言った。純香は、もちろんと承諾した。そして、浅井が乗ってきた車の助手席に乗った。

女子大学生の名前は、伊吹純香。あの青年が見ていた女性である。新東都大学 機械学部 コンピュータ技術科を専攻している。コンピュータ技術に関しては、新東都大学一と言っても過言ではないほどの能力を持つ。浅井は、彼女の能力を高く評価している。彼女を高く評価しているのは、浅井だけではない。超電子計算機開発機構 やつくば未来的技術研究所など、さまざまな研究機関が彼女を技術者として入所させようとしている。Athenaも、伊吹には目を付けていて、現在交渉を進めている。伊吹は、まだ自分は未熟であるとして、断り続けているが、浅井の頼みは、ほとんど承諾している。伊吹にとって、浅井は一番頼りになる先輩なのだ。

「うつ．．．．」

車の中では、伊吹が手で頭をおさえていた。浅井が、あわてて車を止めるが、伊吹は大丈夫だと言った。そして、頭痛のことについて話し始めた。

「最近、激しい頭痛がするようになったんです。そして、なぜか地図のイメージがそのときに浮かびあがるようになって．．．、おそらく愛知県の新瀬戸市あたりだと思います。」

と伊吹は言った。苦しそうに手で頭をおさえる。歯をくいしばって痛みに耐えているようだった。浅井は、伊吹に頼んだ仕事をやめななしょうかと悩んだ。だが、今さら、なかったことにするのも、面倒だったし、伊吹もそれを望んでいないだろう。そう考えて、車を再び走らせた。

「浅井課長からの連絡です！伊吹純香が到着するようです！」

職員からの声を聞いて、山本は立った。伊吹を呼んだのは、山本と浅井だった。これから、松本・箱根への攻撃の目的を「Gate s」で計算する必要があった。その計算作業は、かなり複雑だった。そのため、浅井やシステム課の職員だけで行なってもいいのだが、少し厳しい。そこで、優秀な伊吹が呼ばれたというわけだった。

「そうか．．．、奴らの目的を早く知らなければならぬ．．．。な

ぜ松本なのか・・・、なぜ箱根なのか・・・、くそっ！全く分からん！」

山本がつぶやいた。

「カインは、どこにいるんだ！」

「分からん・・・、しかし、現在は宇部市が可能性としては高い。」

「仕方が無い、アレスの矢を宇部市に落とすしかないな。」

「ああ・・・、それしかない。早くカインを殺さねば・・・、我らの邪魔になってしまう！」

敵軍の会議室にほ、こんな声が響いていた。

3 伊吹純香 ? 〱頭痛〱(後書き)

新瀬戸市・・・尾張旭市・長久手町・瀬戸市が合併してできた市町村。市役所は旧瀬戸市にある。現在、名古屋市との合併を協議中。

一応、イメージ的には、浅井がリツコで伊吹がマヤ(そのまんまです・・・)という感じです。レイは、綾波レイから。純香は、小泉純一郎から(もともと、苗字を泉として使う予定だった)です。今回は、カインの謎が少し分かるかもしれません。

4 伊吹純香 ? 〳新瀬戸市へ〵

「伊吹さん、時間がありません。手短に言います。私たちアーテナに力を貸してください。」

山本とアーテナ次長の涼月^{すすづき}隼人^{はやと}が、頭を下げながら、伊吹に協力を頼んだ。2人は、伊吹よりも20歳以上年上だったが、まったく恥ずかしいとは思っていなかった。人類の危機とも言える状況で、プライドを守ろうとするのは、愚の骨頂。それが、2人の考えだった。伊吹は、承諾の返事をする、と、「G a t e s」の操作をするため、浅井についていった。

「G a t e s」の操作は、いつもは2人で行なっている。非常時には、4人に増やしていた。今は、非常宣言が発表され、4人で操作を行なっていた。浅井は、本来自分の席であるところを空けると、伊吹に座るよう促した。伊吹は、先輩である浅井の顔をみて、少しとまどっていたが、いすに座って操作を始めた。操作内容は、情報を入力することだった。「G a t e s」は、情報不足では答えを出せないからだ。

「G a t e s」を操作している4人の作業速度は、かなりのものだった。さすがは、アーテナのコンピュータ技術者というところだった。浅井は、臨時操作席に座って、情報のチェックを行っていた。伊吹は、山本から協力を頼まれただけあって、他の3人を遥かに上回るスピードだった。しばらくして、伊吹が最後の情報を入力した。あとは、解析をするだけだった。

「情報の入力、完了しました！情報解析モードに切り替え、解析予想時間は10分程度です。」

と、浅井が「G a t e s」の状況が表示されているモニターを見て、言った。伊吹は、席で休んでいた。他の3人も休んでいた。山本と涼月は、少しほっとしたような表情を見せた。これは、アーテナの職員のほとんどが、「G a t e s」を信頼し、解析を全て任せて

いるからだった。「Gates」は、「Finestre SC-2025（イギリス・フランス・ドイツを中心としたヨーロッパ科学研究共同体によって開発されたもの、Finestreを開発したミクロの協力のもとで行なわれている）」や「垓」などのスーパーコンピュータよりも優れている。アテーナーの職員の全員が思っていることだった。

「現在、35%解析完了、残り予想時間約6分です。」
浅井が、現状を読み上げた。

午後5時12分38秒。今度は、山口・福岡・広島・島根だった。パニックを防ぐため、報道が規制され、松本と箱根の件は「調査中」としかニュースでは出されていなかった。しかし、全国に松本と箱根が壊滅したというニュースは、広まっていた。一部では、兵器による攻撃という情報も漏れて、広まっているようだった。しかし、関西は無関係だろう。そんな思いが関西に住んでいる人たちにはあった。そんな中で、大きな揺れは、パニックを引き起こした。さらに、大分県を衝撃で発生した波が襲った。地震の津波のような波。人や家は、抵抗できるわけもなく、飲み込まれていった。

「大変です！山口県宇部市、壊滅しました！北九州市・山口市・下関市・防府市との連絡が取れません！さらに、衝撃による波により、大分県が被害を受けています！」

アテーナー本部に、報告の音が響く。その声は、悲鳴とも怒号ともとれるような大声だった。山本は、さらに考え込んでいた。宇部市に何があるというのだというのか……。なぜ、大都市である広島や福岡は狙わないのか……。全く分からなかった。でも、1つだけはつきりしていること。それは、敵は何かを破壊する必要があるということだった。それが、松本・箱根・宇部にあった。だから、3つの場所が狙われた。そう山本は考えていた。しかし、それが何なのか、それはさっぱりだった。

「何だ・・・？何を壊そうとしている？何を探している？」

と、山本はつぶやく。しかし、つぶやいてもひらめかない。謎だけが広まるだけだった。

「伊吹純香・・・、新瀬戸市の滝ノ水池に來い・・・、今すぐだ。時間がない・・・。」

伊吹は、こんな声が聞こえたような気がした。しかも、何度も。かなりはつきりとした声で、焦っている男性の声だった。かなり若く、20代くらいの声のようだった。伊吹は、少し迷ったが新瀬戸市に行くことにした。浅井に事情を説明し、山本と涼月にもあいさつをして、アテナー本部を出ようとした。しかし、出ようとした伊吹は一瞬立ち止まった。そして、考えてみた。すると、どうやって、愛知県へ行くのか。その問題があることに気付いた。

まず、東海道新幹線は、小田原・三島・熱海の壊滅により、不通となっていた。名古屋と岡山間での折り返しで、運行されているだけだった。さらに、東名高速道路も同じ理由で、通行止めとなっていた。

次に、中央新幹線^{リニア}は、点検のため、運転を見合わせていた。中央本線・中央自動車道も松本・岡谷の壊滅により、不通となっていた。残るは、甲府・富士を経由するルートだが、関東甲信越の鉄道のほとんどは、点検で動いていないのだ。もちろん、身延線も例外ではなかった。

となると、伊吹は一つの方法を思いついた。アテナーの高速移動用小型航空機を使うことだった。そして、山本に頼んでみた。声の様子からして、この危機に関することだろうということも付け加えておいた。もしかしたら、危機から脱出する方法が分かるかもしれないとも。山本は、いいだろうと首を縦に振った。そして、部下の一人に運転させ、小牧まで送ってもらえることになった。伊吹は、航空機に乗った。

「移動し始めたな……。さて、もう一人も呼ぶとするか……。」「
新瀬戸の美青年は、モニターに表示された伊吹の位置を見て言った。そして、別のモニターを見た。そこには、「南木^{みなぎ} 千早^{ちはや}」という名前と顔写真があった。

「くそっ！ 宇部でもなかったか！」

「アダム、これで手掛かりはゼロだ。振り出しに戻ったぞ。」

アダムと呼ばれた男は、しばらく黙っていた。しかし、すぐに不気味な笑みを浮かべてこういった。

「フン……。まあいいだろう。カインとも決着をつけなければならぬ……。カインの死をもつてな……。本格的に行動を開始しろ、頼んだぞ、マルス。」

「分かった……。まずは、アフリカからだな。ガードが弱い。そして、そこを拠点としていこう……。」

「カイン、そしてノアよ……。コスモスで貴様らがした行為の罪……。それを知るのがいい……。そして、貴様らは必ず後悔するのだ……。」

アダムは、そう言うと、大声で笑った。

4 伊吹純香 ? 〱新瀬戸市へ〱(後書き)

ついに、敵の幹部の名前が明らかになりました。アダムとマルスです。由来は、言わなくても分かりますよね？

山口・福岡・島根・広島・大分県の皆様にお詫びを申し上げます。特に、宇部市の方には。庵野秀明さん、すみません。別に悪気はないので・・・。

次回は、南木千早について。カインがしたことが分かるは、もう少しあとになるかな・・・。

5 南木千早 ? 〱救世主ヤベテ〱

9月13日、夜。岐阜県岐阜市のあるホテル。安全性とおしゃれなデザインで人気のホテルだった。女性の間では、かなりの人気だった。そのホテルの302号室に、1人の女子大生がいた。腰まで届く長い黒髪の美少女だった。名前は、南木千早。そう、あの新瀬戸の美青年が見ていたモニターに映っていた女性である。

「大変なことになったな……。まさか、ボクが旅行している時に、こんなことが起きるなんて……。」

と南木千早はつぶやいた。南木は、岐阜に旅行へ行っていた。松本・箱根・宇部の事件は、その旅行中に起きたのだ。南木は、東都大学の3年生だった。伊吹とは、同級生であり、最大の親友でもあった。そして、南木には伊吹と共通した悩みがあった。それは、激しい頭痛のことだった。さらに、夢で声が聞こえるというものだった。あまりはつきりした声ではなく、南木は聞き取ることができなかった。しかし、「愛知」「時間がない」などの言葉は理解できた。でも、この夢を南木はあまり気にしていなかった。いつか元に戻るだろうと思っていたからだ。

その夢は、最近はずきりした夢へと変わっていった。頭痛も次第に激しくなるばかりだった。病院にも何度も行ったが、医師は「疲れによる一時的なもの」と判断した。一応、頭痛に効く薬をもらったが、効果はほとんどなかった。

「仕方がない……。今日は寝て、明日東京へ戻るか……。」

南木は、そう独り言を言うと、ベットに行き、眠りに就いた。

そして、南木は夢を見た。内容はいつもの夢だったが、いつもとはつきりと違うところがあった。それは、声がかなりはつきりしていたことだった。これまでの夢は、何を言っているのか聞き取れない声だった。しかし、その声は南木の耳にはつきりと聞こえた。

「新瀬戸市の滝ノ水池に來い・・・時間がないのだ・・・」
と。南木は、あわてて飛び起きる。目には、いつもの現実世界が映った。時刻は、9月14日、午前4時50分。まだ早いな・・・と思ひ、南木は寝ようとした。しかし、あの夢の声がどうしても気になつてしまふ。なかなか眠ることができなかった。南木は、とりあえず夢に従つてみることにした。夢に従つても、それほどの害はないだろう。南木はそう思つていたのだ。夢に従つたことで、大きな使命を負ふことになるとは、知らずに・・・。

午前10時15分。南木は、荷物をまとめた。そして、部屋を出て、フロントでホテルのチェックアウトをして、ホテルを出た。外には、人はあまりいなかった。まだ、緊急避難警報は出ていなかったが、いつ出るかわからない状況だ。こんなときに外出する人は、あまりいない。ホテルから出る人は、他にもたくさんいた。ほとんどの人が旅行の途中だったようだ。おそらく、自宅にでも帰るのだろう。しかし、南木は違った。彼女は、これから新瀬戸市へ向かうとしていた。

彼女は、鉄道を何度も乗り換え、新瀬戸市に行った。まだ、被害にあつた3つの場所以外の鉄道は止まっていないようだった。しかし、自宅にみんないるせいか、人はあまり乗つていなかった。途中で、名古屋駅の前を見てみたのだが、中部地方の中心都市とは思えないほど静かだった。

「新瀬戸市の滝ノ水池・・・ここか・・・」

南木は、地図を見ながら言つた。これから、何が起こるのか。南木は、それが楽しみでもあつたし、不安でもあつた。

「南木千早・・・、到着したようだね。ノア、彼女をこちらに呼んできてくれ。」

美青年が、隣にいるノアと呼ばれた男性に言つた。ノアは、35

歳あたりだろうか。外見からして、そのくらいだった。

「分かった。」

とノアは承諾する。そして、地下空間の出入り口から、外へ出た。この出入り口は、カモフラージュされていて、素人には見つけれないようになっている。さらには、侵入者を撃退するシステムまで配備されているというものだった。

「救世主か・・・、ついに私の子ともいえる人物との対面となるな・・・」

とノアはつぶやきながら、南木に近づいていった。そして、南木に声をかけた。

「南木千早さんか・・・。私は、君をここへ呼び出したものだ。頼みがある。力を貸してくれ。」

と。南木は、突然声をかけられて、少し驚いていた。しかし、すぐに冷静さを取り戻し、しばらく考えた。そして、夢の声と同じような声をしていることに気付いた。南木は、ノアの言うことは本当だと確信し、ノアについていった。少し疑いと警戒の目を向けていたが・・・。

カモフラージュされたドアを開けて、2人は地下空間の中へ入っていった。そして、地下空間にたどりついた。南木は、あたりを見回していた。そして、かなり驚いていた。まさか、新瀬戸市の地下にこのような空間があるとは、と。地下空間には、建物が1つポツンとあった。しかし、それは地下空間が大きいからポツンと見えるだけであって、建物が小さいというわけではなかった。建物は、かなり大きく、南木の予想を超えていた。

「カイン、千早さんがお見えだ。」

「そうか、すぐ行く。」

と、ノアはポケットにある電話のようなもので、何か連絡を取った。電話は、南木が見たこともないほど、小型化されていた。なぜ、このような高度な文明が地下空間に存在するのか。南木はそう思っ

た。

しばらくたってから、カインが現れた。そして、カインは、南木にこういった。

「ようこそ。千早さん。いや、今は地球を救う救世主ヤペテと呼ぶべきかな？」

救世主……。地球を救う……。何やらとんでもない話になりそうだ、と南木は思った。もう、後戻りのできないところまで来てしまったのかもしれない。ボクは、重要な仕事をしなければならない。南木の心を不安が支配した。

5 南木千早 ? 〴〵救世主ヤベテ〴〵(後書き)

南木千早。一人称は「ボク」、いわゆるボク少女ってやつですよ。
コナンの越水・世良の影響もありますね。結構好きだったりします。
学園エヴァみたいな存在になる予定の、アナザーストーリーでも出
していいかな……。

次は、カインとノアの目的が明かされます。戦争もまもなく始まっ
ていきます……。ちなみに、巨大ロボットの登場はありませんの
で、ご了承を。

6 南木千早 ? ーカインの過去ー

「カインさんでしたよね？説明してもらえます？なぜ、ボクなのか、そしてボクは何をする必要があるのかを。」

と南木は、カインに言った。カインは、昔のことを思い出すように、静かに話し始めた。

「遙か昔。いや、具体的に言うと150億年ほど前かな？グリーンランドという星があった。そこには、千早さんのような現在の人類と同じ外見を持つ文明生命体があった。しかし、文明生命体がいる星はそこだけではなかった。僕は、その1つ、エデンという星の軍人だった。と言っても、前線で戦ったり、指揮はしない。後方からコンピュータなどで補助する仕事をしていた。そして、エデンは、不老不死を求めている。病気では死ぬことが無い・・・、衰弱も全くない・・・。そんな体を求めている。そして、その願いをかなえるものが一つだけあった。それが、生命の木の実だ。生命の木は、自然界には存在しない植物だが、人工的に生成することはできた。その生成をエデンのリーダーであるアダムは、科学研究所に命令した。そして、しばらくして、アダムは生命の木の实を手に入れることに成功した。そして、数少ないその実のうち、いくつかを研究用にし、残りはアダムやアダムの妻イヴ、軍の総帥マルスたちに与えた。僕もそのうちの一人だ。しかし、生命の木はそれ以上生成はできなかった。原因は不明だ。ただ、他の文明生命体が存在する星にあるということとは分かっていた。そこで、アダムは、その星を占領し、生命の木を奪おうと考えた。さらに、星の資源も奪うつもりだった。結果は、成功。グリーンランド以外の星はエデンのものとなった。そして、エデン軍はグリーンランドに侵攻した。エデン軍がわずかに優勢だった。しかし、そのとき、僕はこのエデンの行動に疑問を抱いた。そして、エデンを裏切ることにした。この時、仲間になっ

たのが隣りにいるノアだ。彼もエデンの行動に疑問を感じていた。僕たちは、エデンを裏切り、義弟のアベルを殺害した。その後、エデンの要であるコンピュータシステム『CHRIST』^{クライスト}を乗っ取り、自爆を実行させた。エデンを破壊したのだ。アダム・イヴ・マルスは脱出して、グリーンランドの前線基地へ逃れていった。その頃、グリーンランドの新兵器『ドレイク・ソード』にエデンは苦しめられていた。僕たちは、グリーンランド軍と接触し、協力を得ることに成功した。そして、イヴを殺害、アダムを追い詰めた。しかし、アダムは、細菌兵器『タナトス』を使用し、自爆した。この細菌で、アダムとエデン兵士は全滅したが、グリーンランド兵士・住民も全滅、みな死んでしまった。さらに、マルスが『ボイド』と呼ばれる無の空間に脱出してしまった。マルスの殺害に失敗した僕たちは、世界の核を破壊^{コア}。生命の卵に還元し、再び新たな宇宙を創った。」と、カインは少しずつ休憩も入れながら、この話をした。

南木は、まだ理解ができていなかった。タナトス、ボイド、エデン……。理解できない単語ばかりだった。しかし、そのエデンがどうやら今回の敵らしいというのは、分かった。

カインは、考えこんでいる南木に、続きを話してもいいかと聞いた。南木は、とりあえず聞くことにした。カインは、南木が承諾したことを確認すると、続きを話し始めた。

「その新たな宇宙が、アース、つまりこの世界だ。しかし、マルスが惑星にたどり着いてしまった。そして、そこで再びエデンを造り始めたのだ。アダム・イヴ・アベルも思考データが残っていたため、復活してしまった。そして、僕とノアへの復讐と、生命の木と資源を手に入れるために地球を攻撃したというわけだ。ちなみに、松本・箱根・宇部を攻撃したのは、「アレスの矢」と呼ばれる兵器で、目的は僕を探すためだ。しかし、『CHRIST』^{クライスト}は計算を誤ったらしい。ここ、新瀬戸とは、まだ気付いていないはずだ。もう、千早さんへ頼みたいことはわかってはいるはずだね。地球を救ってほし

い。つまり、エデンを倒せつてことだよ。」

やはり……。カインの最後の言葉に南木はこう思った。地球を救う……。何もない平凡なこのボクが……。？少し信じられなかった。その以前に、ボクは地球を救えるのだろうかと南木は思った。そして、南木は一番聞きたかったことを聞いてみることにした。

「なぜボクなんですか？」

カインは、ノアに説明するように言った。ノアは、カインの言葉を聞くと、説明を始めた。

「南木家は、私がつくった家なんです。予測されるエデンの侵攻を防ぐための救世主として。そして、あなたは、特殊能力を受け継いだ者です。限界という壁を超え、人の持つ最大限の力を出すことができる者なのです。もちろん、あなたの父親も、救世主としての資格を持っていました。しかし、死亡したことで、長女である千早さん、あなたに救世主としての資格が継承されたというわけです。」

南木は、驚いていた。まさか、この南木家が神に選ばれた、救世主の家だったとは……。確かに、父親は5年前に事故で亡くなっていた。しかし、その時に救世主の資格がボクに受け継がれたとは……。これは予想以上のことだった。カインが、ノアの説明に付け足した。

「とりあえず、千早さんは、今言ったことを誰かに連絡してください。確か、アーテナーとか言った組織があったはずですよ。ちなみに、今言ったことはデータにして、この記憶装置に入っていますので、メールに添付して送れば良いと思います。」

南木は、突然のことに一時思考が停止していたが、カインの言葉ですぐに動き出した。そして、アーテナーへどうやって連絡するかを考えていた。南木は、アーテナーとは無関係だった。強いて言うなら、以前純香のサポートとして、アーテナーに行つたぐらいだった。彼女は、知り合いにアーテナーの関係者がいないか考えていた。

（アーテナー……。アーテナー……。確か、浅井先輩ってアーテナーで働いていたような……。）

そして、気付いた。浅井レイがいたことに。そして、浅井に電話をかけた。しばらくコール音が鳴っていたが途切れて、

「もしもし、千早ちゃん、どうしたの？」

という浅井の声がした。南木は、浅井にカインが言っていたことを短くまとめて説明した。そして、詳しい情報は、データで送ると連絡した。浅井は、南木の話聞いて少し驚いていたが、連絡が終わると、最後に冷静な声で

「ありがとう、参考にさせてもらうよ。じゃあ、頑張ってね。」

と言った。冷静だったが、優しさにあふれている声だった。浅井の性格の良さを南木は改めて感じた。

「・・・というわけらしいです。」

浅井は、山本と涼月に南木から送られてきたデータを見せつつ説明した。山本は、この情報の信憑性を浅井に聞いた。浅井は、迷うことなくこう言った。

「私は、この情報は間違いなく正しいと考えています。」

浅井は、南木を心から信じていたのだ。山本は、少し考え込んでいた。そして、こう命令した。

「緊急避難警報発令！各国政府に通告、地下避難所への避難を急がせろ！」

アーテナー本部にサイレンが響き渡った。そして、そのサイレンは世界中へと広がっていった。

6 南木千早 ? 〱カインの過去〱 (後書き)

登場人物紹介・世界観紹介も追加する予定です。しばらくお待ちを・
・。
・。

7 3人のつぶやき ―戦争準備―

伊吹の乗った小型航空機は小牧飛行場に到着した。伊吹は、小型航空機を降り、新瀬戸市へ向かった。そして、滝ノ水池に着いた。

滝ノ水池には、一人の青年がいた。そう、カインのことである。伊吹は、青年に声をかけようとした。だが、その前に、青年が伊吹に話しかけてきた。

「伊吹純香さん、ですよ？あなたを夢で呼び出した者です。詳しい話は地下でしましょう。とりあえず、こちらへ。」

青年はこう言うと、壁を指差した。伊吹が、壁をどうやって通ればいいのかと困惑していると、急に壁が消えて、扉となった。カモフラージュをして、外から気付かれないようにしているようだった。伊吹は、地下空間へと入っていった。伊吹は、南木が見た光景と全く同じ光景を見た。そして、同じように驚いた。かなり高度な文明が地下で発展しているようだった。

伊吹は、青年についていき、ある部屋まで行った。伊吹は、そこでさらにびっくりした。その部屋に南木がいたからだ。南木も、夢で呼び出されたのだろうか……。そんなことを考えていた。しばらくすると、青年よりは少し年上の男性が現れた。そう、ノアのことである。まず、2人は自分の名前を言った。そして、自らの過去のこと、伊吹がやらなければいけないこと……。など、南木にしたように説明した。伊吹は、だいたい理解できたようで、協力することを承諾した。

「これで、2人の救世主、伊吹純香と南木千早が揃った。エデンよ、そしてアダムよ、いつでも来るがいい……。」

と、カインは言った。

「緊急避難警報を発令します。日本国民のみなさんは、すぐに地下

避難所へ避難をしてください。ちなみに、緊急避難警報発令により、ただいまより緊急避難特別法の適用期間となります。緊急避難特別法に違反している方は、解除後、処罰される恐れがあります。緊急避難特別法を遵守してください。」

日本では、緊急避難警報発令を受けて、全てのテレビ局が総理大臣である醍醐^{だいご}尊^{たける}の会見を流していた。これは、日本だけではなく、世界中のどの国でも同じだった。そして、地下避難所に次々と住民は避難していった。日本特殊自衛隊・アメリカ特別軍など、各国の精鋭たちが集まり、地球防衛軍がつくられた。総帥は、アメリカ特別軍のトップであるサトガ・フォレストルで、副司令官は日本特殊自衛隊総司令の初瀬^{はつせ}保一^{やすいち}だ。地球防衛軍の本拠は、三鷹（日本）に置かれた。また、北京（中国）・マサチューセッツ（アメリカ）・ベルリン（ドイツ）・ブレトリア（南アフリカ）・ブラジリア（ブラジル）・ニューデリー（インド）・キャンベラ（オーストラリア）に方面軍の拠点が置かれた。それぞれの大륙・地域に1つずつ方面軍を設置することで、地球を侵略者から守ろうとしたのである。拠点では、訓練が行なわれていて、いつでも出撃できるようになっていた。

「占領できるもんなら、してみる・・・。」
とフォレストルはつぶやいた。もちろん英語でつぶやいたということとは、言うまでも無い。

「エデン軍先鋒は、第1分隊と第2分隊に任せる。その後、我々も地球に向かう。第1分隊長ハデス、第2分隊長クロノス、分かったらすぐに出撃しろ。第1分隊は南アフリカから侵攻、海岸線及び周辺の上空を防衛しつつ、北上。第2分隊はサハラ砂漠に着陸、ヨーロッパ・アジアの軍を牽制しつつ南下。とにかく、アフリカ大陸を占領しろ。」

マルスの命令に、ハデスとクロノスが返事をした。ハデスは、口笛を吹きながら司令室を後にした。クロノスは、上機嫌なハデスを

見て、苦々しい顔をしながら、ハデスの後を追った。

ハデス率いる第1分隊は、圧倒的な戦闘力を持った分隊だった。それは、ハデスの力量によるものだった。しかし、彼には1つ大きな弱点があった。彼は、自身の功績を自慢し、他の分隊に対して強い態度で接したり、敵を必要以上に侮ってしまう傾向があったのである。だが、部下への接し方はいたって普通で、部下からは慕われている。アダムとマルスは、ハデスの弱点を知りつつも、その圧倒的な強さを生かすために分隊長にしているのだ。口笛を吹くという不遜な態度を許している理由もこれだった。そのためか、他の分隊長や兵士の間からは、「曩肩男」とかいう類の通称がつけられていた。クロノスも、ハデスの実力は評価しつつも、性格の悪さを嫌っていた。

マルスの隣にいた、軍のナンバー2であるケルビムがマルスに小声でこう言った。

「あの二人で大丈夫でしょうか？せめて、ハデスだけでも外したほうが、よろしいかと・・・」

ケルビムは、慎重な男だった。彼は、先鋒の司令官2人はあまり仲がよいことを知っていた。その仲の悪さが、アフリカ攻防戦に影響するのではないかと心配したのだ。しかし、マルスは首を振りながら、こう言った。

「大丈夫だ。こちらの軍備は充実している。敵が我々の100倍の兵力だったとしても、勝てるよ。技術力の差は大きいからね。それに、先鋒隊出撃の10日後には、我々が向こうに着いている。心配することはない、ケルビム。」

マルスの顔は、自信で満ち溢れてた顔だった。ついに、地球とエデンの戦争が始まる・・・。

7 3人のつぶやき ー戦争準備ー（後書き）

次回予告

「長い長い悲しみの始まり ー初戦闘、技術力の差ー」

ついに、地球とエデンの戦争が始まる。エデンが最初に狙ったのは
アフリカ大陸。サハラ砂漠・南アフリカに、ハデス・クロノス率い
るエデン先鋒隊が出現。南アフリカで待機していた地球防衛軍アフ
リカ方面隊と戦闘。その結果は・・・。

作者より：次回予告を入れることにしました。タイトルは予定なの
で、変更する場合があります。更新頻度を上げたいのですが、なか
なかモチベーションが……。まあ、飽きない程度にマイペースで
いきますので、よろしくお願いします。

追記：南アフリカからサハラ砂漠・南アフリカに変更。計画性がな
くて、すみません……。

8 長い長い悲しみの始まり　　初戦、技術力の差

「ケープタウンから南へ20kmの海上に、謎の軍が出現しました！陸海空全て揃っています！兵士数は不明です！」

若い女性の声が、司令室に響く。モニターには、明らかな異常が現れていた。ケープタウンを表す点の下の方に、赤い丸があった。想定外の何かが起こったということだった。その何かは、偵察機を向かわせることで正体が判明した。大型の船のような物が海に浮かんでいたのだ。中に何かあるのかは不明だったが、おそらく兵士が兵器だろう。しかも、その後偵察機が破壊されたことから、敵は空軍を持っていることが分かった。さらに、工作用潜水艦も破壊された。つまり、敵は海軍も持っているのだ。陸海空全て揃った完璧な要塞のような船だった。それが、ケープタウンへと向かってきていた。アフリカ方面軍の司令官を務める南アメリカ人のウィナー・モトランテは、こう指示した。

「ケープタウン周辺の海岸線を固める！それから、アーテナー・ヨロップ方面軍・西アジア方面軍に連絡しろ！援軍要請だ！」
この指示に部下たちが動き出した。その部下の姿を見て、ウィナーは、

（絶対に地球を守ってやる・・・）
と心の中で思っていた。

「山本総長、ケープタウンの南に謎の軍が現れたそうです。伊吹さんの言っていたエデンの軍だと思われます。総長、方針はいかがいたしますか？」

と、アーテナーのナンバー3である総務部長 兼 総帥付参謀のイギリス人、マーシャル・ウォーリアが流暢な日本語で山本に質問した。

ウォーリアは、アーテナーの上級幹部として、山本から直接入所

を要請された優秀な軍人だった。事務作業や作戦立案を担当している。

山本は、少し驚いた顔をしたが、そこはさすが総長、ほとんど表情を変えずにこう言った。

「対陸海用狙撃塔をスタンバイさせる。日本には上陸させるな。それから、この兵200万をアフリカ増援に回せ。あとは・・・、

「超高威力投下型反応兵器」の準備をしておけ。」

「了解しました！」

とウォーリアは言った。そして、部下たちに指示をした。

「こちら、ハデス。第1分隊、南アフリカの南方沖に着水成功。戦艦モードに切り替え、ケープタウンより上陸を開始します。」

「こちら、クロノス。第2分隊、まもなくサハラ砂漠に着陸します。第1分隊を敵が攻撃している隙に、着陸。その後、アフリカ北部を占領する予定です。」

エデン軍の司令室。ハデスとクロノスからの報告が入った。今のところ、作戦通りで順調に進んでいた。マルスの顔には、自信が満ち溢れていた。そして、2人に了解と返事を出した。

「あれが敵船だ！絶対に上陸を止め！」^{ヨイチ}「超遠距離狙撃銃」の発射準備をしろ！航空隊は攻撃を開始だ！」

と、アフリカ方面軍所属ケープタウン分隊長のアルバコア・サザナミが叫んでいた。彼は、方面軍本隊からの援軍がくるまで、敵を足止めしようとしていた。どんな手を使っても・・・。

「ヨイチ、発射します！敵艦Aに向けて発射！3、2、1、0！」
女性の0の声と同時に、あたりに爆音が響いた。ヨイチの電磁弾が発射された音だった。光となった電磁弾は、敵の戦艦に向かっていった。そして、命中した。その後、戦艦は壊れ爆発する・・・はずだったが、爆発しなかった。それどころか、全く被害がなかったのである。サザナミは、一度目をこすった。この結果が幻覚でないか

を確かめたのだ。しかし、現実だった。攻撃は、全く効果がなかったのだ。サザナミは、動揺し始めていた。敵が思ったより強かったからだった。

「航空攻撃開始します！……うわぁ！」

戦闘機が1機バラバラになって海へ落ちた。大きな音がした。そして、他の戦闘機もバラバラになっていった。どうやら、敵の攻撃によるものようだった。何回か戦闘機の攻撃が命中したが、これも全く効果はなかった。

「なぜだ……。なぜ、効果がない！なぜだ！」

ケープタウン分隊前線司令室に、サザナミの声が響いた。

「フツ、この程度か……。さてと、本物の攻撃ってやつを見せてやるか……。よし！航空戦闘機10機を出撃させる！海岸線にいる敵を撃滅するのだ！」

と、ハデスは少し笑いながら言った。と同時にハデスはがっかりしていた。彼は、戦争に娯楽を求める好戦的な性格の男だった。劣勢や互角の戦いを好み、優勢の戦いを嫌っていた。優勢な状況で進む戦争など、おもしろみのないゲームと同じと考えていたのだ。しかし、どんな戦争であっても、戦はある程度楽しい。今回はどのくらい楽しめるかな……。と考えるハデスであった。

エデンの航空戦闘機10機が海岸線を守るケープタウン分隊に近づいていった。サザナミは、航空戦闘機を攻撃するように命令した。そして、対空砲や対空ミサイルなどが発射された。さらには、ケープタウン分隊の戦闘機を出撃させて、迎撃した。しかし、全くその攻撃は効果がなかった。敵機の装甲が強いためか、敵機が何かで守られているのかは分からないが、とにかく敵のダメージは0だった。「攻撃開始！」

とハデスが命令する。航空戦闘機の下から、爆弾のような物が出てくる。そして、その爆弾が投下された。あっという間に下まで落ち

ていく。サザナミは死を覚悟した。自らがいる建物のほぼ真上に爆弾が落ちてきたからだった。そして、その爆弾は地上に着く寸前に爆発した。巨大な炎と煙があがった。兵士たちは血まみれになり、心臓は既に止まっていた。動いているものも、心臓の動きは微々たるもので、すぐに倒れこんだ。サザナミの心臓も停止していた。ケープタウン分隊は全滅したのである。

「ケープタウン分隊との連絡が途絶えました！ケープタウン周辺に敵軍以外の生命反応はありません！」

という報告がアフリカ方面軍の司令室に響いた。ケープタウン周辺に味方の軍がない……。これが表すものは、ケープタウン分隊全滅だった。しかも、一瞬にして。

「まさか……。これは、技術力の差なのか？」

ウィナーは驚きを隠せなかった。

8 長い長い悲しみの始まり　　初戦闘、技術力の差（後書き）

次回予告

「皆殺し　血に染まる避難所」

エデン軍がアフリカに上陸する。アフリカ南部は、次々と占領されていく。方面軍の拠点は北へどんどん移っていく。そんな中、アフリカ南部から逃げてきた兵士から驚くべき情報が……。

作者より：外国人の名前とか、外国の地形とか……全く分かりません。ですので、そこところは勘弁を……。僕は、世界を駆け巡って情報を集めているわけではありませんので……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8401y/>

人類の希望

2011年12月13日00時53分発行